

本土復帰後の十年を象徴する「象」の活動 名護市庁舎など作品群の保存・活用へ

本土復帰の前年から十年間、「象」は沖縄で活躍した。「象」とは象設計集団という本土の建築家グループである。一九八一年に完成した名護市庁舎の設計で名高い。しかし、本島北中部で数多くの地域計画の立案に携わり、県内に6つの作品群を残したことを知る人は多くない。

本土復帰に尽力した南方同胞援護会からの依頼を受けて、沖縄こどもの国開設、波照間の記念碑建立などの復帰記念事業に携わったのが、彼らのキャリアの始まりであった。

この後、海洋博に向けた土地買収、開発に伴う自然・文化の破壊に憂えた自治体から依頼を受けて立案に関わった地域計画では、自然との共生、第1次産業の振興、住民参加を原則に掲げ、外部資本導入による開発の波に対抗した。また、神アサギ・字公民館・共同売店を核に、腰宛の森に守られ、山から海に至る水系に沿う伝統的な集落に着目して、地域づくりの基本に位置づけた。ここには、SDGsの達成を目指す現代の地域計画に通じる視点を見出すことができる。

この成果として、名護湾の埋立地に緑を取り戻す「二十一世紀の森公園」や返還された石川ビーチの埋立を回避する「白浜原公園」、字公民館の役割を都市レベルに高める「今帰仁村中央公民館」「名護市庁舎」が誕生した。全国に類を見ない沖縄の地域誌・字誌の普及、琉球在来豚アゲーの育成などにも影響を与えている。

象の活動は、本土復帰後十年を象徴する大切な記憶である。しかし、半世紀を経る中で、作品群の損傷は進み、保存の是非が検討される時期が近づいている。すでに、こどもの国の博物館は取り壊されてしまった。

象の作品以外でも同様に復帰記念の施設である沖縄少年会館が2012年に解体されたように、近現代の文化財への関心はまだ低く、喪失の危機にさらされがちである。永らく沖縄で地域づくりに携わってきた私自身も、北大東島の近代産業遺産の保存に取り組む中で困難を経験してきた。

北大東島での取組の最中、今帰仁村の景観計画の担当者が今でも象の地域計画を大切に読み込んでいることを知り、感銘を受けた。象の地域計画を再評価する研究を始めたきっかけであり、以来、資料の収集、関係者へのインタビューを続けている。

名護市の湾岸構想や今帰仁村役場の周辺整備の中で、象の作品の保存についての議論が始まりつつある。個々の建築物、自治体の問題としてだけでなく、一連の地域計画を再評価しつつ、その表れとして象の作品群を一体で捉え、山原から八重山に至る県全体の問題として保存・活用の議論が盛り上がっていくことを期待したい。(愛知県犬山市在住、中部大学教授)